

The Very Thought Of You

君を想いて

Rob Agerbeek Trio

ロブ・アフルベーク・トリオ

1. ベサメ・ムーチョ

Besame Mucho 〈 Velazquez 〉(4：29)

2. ディス・マスカレード

This Masquerade 〈 L. Russel 〉(3：39)

3. パークス・ワークス

Birks Works 〈 D. Gillespie 〉(4：12)

4. トラブル・イン・マインド

Trouble In Mind 〈 Richard M. Jones 〉(5：16)

5. ワンス・アイ・ラブド

Once I Loved 〈 A. C. Jobim 〉(6：33)

6. ワルツィング・アット・スイート・ワン

Waltzing At Suite One 〈 D. Hazeltine 〉(5：18)

7. 時には母のない子のように

Sometime I Feel Like Motherless Child 〈 Trad 〉(3：42)

8. アローン・トゥゲザー

Alone Together 〈 A. Schwartz 〉(3：08)

9. 雲

Nuages 〈 D. Reinhardt 〉(3：23)

10. ティン・ティン・ディオ

Tin Tin Deo 〈 D. Gillespie, C. Pozp 〉(3：59)

11. 君を想いて

The Very Thought Of You 〈 R. Noble 〉(5：59)

ロブ・アフルベーク Rob Agerbeek 〈 piano 〉

ハリー・アメリー Harry Emmery 〈 bass 〉

ベン・シュローダー Ben Schröder 〈 drums 〉

録音：2005年7月6、7日 スタジオ44、オランダ

©© 2005 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

＊

Produced by Tetsuo Hara.

Recorded at Studio 44 in Monster Holland on July 6 & 7, 2005.

Engineered by Max Bolleman.

Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound：Shuji Kitamura & Tetsuo Hara.

Special Thanks To M.G.M.Produzioni Musicali.

Front Cover：© 2005 Mai Miyake.

Designed by Taz.

レコードから『キープ・ザ・チェンジ』の2枚のアルバムを発表する。このクインテットを率いて国内外、多くのジャズ・フェスティバル、テレビ番組などに出演した彼は、76年、アート・ブレイキー率いるジャズ・メッセンジャーズに参加し海外をツアーした。アメリカのミュージシャンとの大きな共演では、デクスター・ゴードンの『オール・ソウルズ』というアルバムに参加したことが挙げられる。このことを彼自身も非常に誇りにしているらしい。77年、彼は自身のトリオを結成する。80年にライムツリー・レーベルへ『ミス・ディー』を録音。CD時代になってからは91年の『スィング・ギフト』、92年の『セコンド・オビニオン』がある。ドラマーのベン・シュローダーは、1955年5月15日生まれ。このトリオのレギュラーメンバーである。前記の“ スィング・ギフト ” からの長い付き合いだ。彼はトリオとしての活動以外でもテナー奏者のルード・プリंकやハリー・ヴァーベクのグループなどで精力的に活躍している。ベースのハリー・アメリーは1951年8月13日生まれ。彼もこのトリオのレギュラーメンバーで、アン・パートンの伴奏者として活動していたことがあり、彼女のレコーディングにも参加した。今回の録音では、彼のベースが非常によく捉えられており、アタックの効いたベース音を思う存分味わうことができているらしい。

ベサメ・ムーチョ

出だしのエキセントリックなリズムの後、突然、哀愁漂うあのメロディーが出現するあたりは、リスナーの方もきっと驚くであろう。以前よりも重量感の増したピアノが、念を押すように語ってゆくメロディーラインを深く心に染み渡らせる。

ディス・マスカレード

これは91年の“ スィング・ギフト ” の1曲目に収録されていた。

今回の新録では以前と違い、最初から手の内をすべてひけらかすことはしない。つまり初めから彼の持つ独特の節を全開にすることなく、それを手の内に秘め演奏は進んでゆく。そしてここぞ！という時に惜しげなく披露するのだ。こういうところは初めて耳にする彼のスタイルであり、常にミュージシャンとして進化していることを実感した。

パークス・ワークス

まるで暗闇を忍び足で近づいてくるような出だしにはゾクゾクさせられる。右手のすばやいフレー징ングが見事に決まり、実に爽快。アフルベーク節が満載の演奏となった。

トラブル・イン・マインド

楽しく歌う右手のラインと左手のアクセント。アフルベーク本人はこういう曲をプレイするのが一番好きに違いない。

ワンス・アイ・ラブド

ピアノに深い呼吸がある。このことが音楽の細部をくっきりと浮かび上げらせ、リスナーは曲の隅々にまで共感することができる。

ワルツィング・アット・スイート・ワン

デイビット・ヘイズeltaインのオリジナル。スタンダードの演奏が多かったアフルベークにとっては新たな挑戦だ。この曲は伝統的なワルツのテンポに乗り、現代的な雰囲気の旋律が登場する。まるでビー玉を手の中でコロコロと転がすように音を運んでゆく実にチャーミングな演奏。そこに現代ジャズ特有の少しクールな風がなびいているところも雰囲気がある。彼のプレイスタイルが現代の曲とこれほどマッチすることに驚くばかりである。

時には母のない子のように

音楽に深く沈みこみ奏でるピアノと哀愁漂うベースソロに魂を揺さぶられる。涙なくして聴くことができない。

アローン・トゥゲザー

アタックの効いた硬いベース音が印象的で、これに負けじと後ろから“ カツーン ” と響く硬質なピアノがちょっかいを出す微笑ましい演奏。これ程ハリーのベースが気持ちよくマイクに捉えられたのは今回が初めてであろう。

雲

2分02秒からの4秒間に息を呑む。このように熱く語りかけられると、グッとピアノに引き込まれる。バラードでも魅力的な一面を見せてくれる。

ティン・ティン・デオ

彼はラテン調の曲と相性がいいように思う。主題後のアドリブパートはアフルベークの魅力が満開。緩急自在にフレーズを出し入れする妙技に舌を巻く。

君を想いて

心からメロディーを大切にプレイする。こういう曲は年とともに説得力が増すのではないかと彼がリタイヤしていた時間は無駄ではなかった。

以前、原プロデューサーとお会いした時に、「メジャーだろうがマイナーだろうが、私は自分が聴きたいと思う作品をリリースし、みんなにそれを聴いて喜んでいただきたい」という話を聞いた。この子供のように純真な情熱が、アフルベークを再び鍵盤の前へと座らせることに成功させたにちがいない。今回、ヴィーナス・レコードから彼のアルバムがリリースされることにより、多くのCD世代のリスナー及び、LP時代からのファンの方々に、埋もれかけたオランダの才人の新録を聴いていただける機会ができたことは、これからのジャズ史にとっても非常に大きなことであろう。

2005年8月23日・鎌田寛明

「今年のベストワンの作品ができたよ！」と原プロデューサー

ーからCDを渡された。待ち焦がれたロブ・アフルベークの新作がついにヴィーナス・レコードからリリースされる。ヴィーナス・レコードは、エディー・ヒギンズ、スティーヴ・キューン、ハロルド・メイバーンといった看板アーティストの作品で、現在のピアノ・トリオ・ファンの拡大に大変貢献しているレーベルである。

一方で、ブルーノート契約前のジャッキー・テラソン、アンドレア・ボツツァ、ダニーロ・レアなど、日本に初めて紹介されるピアニストのアルバムもリリースしている。私はヴィーナス・レコードのこういう点に驚かされてきた。今回リリースされるピアニスト、ロブ・アフルベークもその一人に挙げる事ができるのではないだろうか。

今回、アフルベークの新作がリリースされるまでには、ちょっとしたエピソードがある。昨年（2005年）の11月に吉祥寺のジャズ喫茶メグで行われたあるイベントにおいて、原プロデューサーから発せられた言葉がそもそもの始まりであった。その日、私は自分の好きなCDをそのイベントでかけたのだが、その直後に客席の最後部から突然、原氏の大きな声が飛び込んできたのだった…「そのCDを私にくれないか？」。数年前に偶然手にしたそのCDに私は虜になっていた。ミュージシャンの名はロブ・アフルベーク。彼のCDは日本で非常にレアであり、一部の熱心なファンにのみ知られているピアニストだ。彼のピアノはスタンダードの魅力をストレートに、妙にこねくり回すことなくありのままに表現する。彼の右手から繰り出される高速フレーズの数々が魅力的で、こちらの期待するところでズバリ、期待以上の形で飛び出してくる。私は、この素直で楽しく爽快で、時として鋭く切り込んでくるスリリングなピアノに心底惚れ込み、毎晩のように聴いていた。原氏は満面の笑みを浮かべ、「私はこの演奏が大好きだ。だから彼のアルバムを録音する！」と確信を持って言った。「このピアニストはマイナーな存在で、しかも既にリタイヤし、オランダのどこの町で暮らしているのかもわからない」という私の話はまったく耳に入っていない様子で、そのCDを片手に意気揚々と帰っていった。「はたして彼とコンタクトは取れるのであろうか？」それ以来、私はこのことが気になって仕方がなかった。もし上手くゆけば、彼の演奏をヴィーナスのハイパー・マグナム・サウンドで聴くことができる。

あれから8ヶ月が過ぎた今年7月、私の携帯が鳴った。「明日からアフルベークを録音しにオランダに行ってくるよ！」。イベントでの出来事同様、あまりに突然の言葉であった。原氏はアフルベークの居場所を見事突き止め、リタイヤしていた彼を再びジャズ界にカムバックさせてくれたのだ。こうして彼のアルバムは無事日本で初めてリリースされることになったわけである。

さて、本作で初めてロブ・アフルベークというピアニストを知る方も多いであろうから、ここで彼の経歴を紹介しておきたい。ロブ・アフルベークは1937年9月28日、インドネシアのジャカルタに生まれた。17歳の時に家族と共にオランダへ移住。ピアノはビート・ジョンソンやアルバート・アモンズといった、ブギウギ・ピアノの大家に影響を受けると同時に、モダンジャズにも興味を持ち、独学でジャズ・ピアノを習得する。オランダ国内で彼は“ ミスター・ブギー ” というニックネームで呼ばれている。50年代中頃から60年代初頭にかけてはジャズ・コンペで三度優勝し、その後、アメリカ、ヨーロッパのミュージシャンたちと共演を繰り返した。中でも62年にはダイヤモンド・ファイブと共演をしている。69年、自身のクインテットを結成した彼は、ポリドールから『ホームラン』、ミュージック・